Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

124

森　の　通　信　　2017. 4. 4

さあ森林再生(タンジュン･プテイン国立公園ブグルの森林火災を防いだ植林７～８年目の森)

（２０１４年９月撮影）

CONTENTS

・People(43)イサム……p3
・ブグルエリアで今起こっていること･･･p4～p5
・タンジュン・プティンの森林再生へ････p6～p7
・現場主義ならでは……p8～p9
・総会の報告……p10～p12
・ワンフェスと３ヶ所セミナー……p13～p15
・インドネシアの森林火災……p16～p17
・パーム油学習会報告……p18～p20
・パーム油に発がん性？……p20
・世界の森林ニュース……p21
・会員から……p22
・読書案内「生物多様性どう生かすか」……p23

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
2017.4.4 124

ウータン・森と生活を考える会は来年30周年を迎えます。生まれたての赤ちゃんが一端の大人になっている（はずの）年月ですから相当なものです。僕はウータンに参加して9年弱のまだまだ若輩モノですが、初期からいるメンバーはもっと長い間、月に数回のミーティングを雨ニモマケズ、風ニモマケズ、会報誌を123号も発行するなどコツコツと活動を続けています。それでもメッタなことでは疲れず、代表の西岡さんはじめ一同ワイワイやっています。そして、最近は20代の物好きなヤングメンバーも集まってきて、古くからウータンを知る方からも、「最近ウータン頑張ってるネー！」という声を頂戴しております。

そんなウータンが、「関西地域NGO助成プログラム」から助成金をいただいて今年度行ってきた事業があります。その名も「ベテランに学ぶ！ボルネオの森を守るための情報収集と分析力」。ウータンの長年の知恵と経験を次世代に引き継いでいこうと企画しました。

昨年10月9日に交野市の奥村さんのご自宅兼レインボーサークル事務所で聞いた「ウータンのこれまでを振り返る～ラミンキャンペーンはなぜ成功したか～」では、当時活躍したメンバーが懐かしいラミン材キャンペーンの記憶をコンコンと掘り起こし、活動展開や戦略、行動に際して意識していた事を振り返って新しいメンバーと共有しました。11月3日に泉佐野市と岸和田市で行った「ベテランの技を継承！～貿易港で蘇る、体当たり調査のコツ～」では、釣り人や工場の守衛さんに実際に（イキナリ）ヒアリングをするなど、現場ならではの体験型のオモシロおかしな一日となりました。

11月15日にウータン事務所で開催した「WEBからの情報収集分析～ベテランの頭の中を“見える化”！～では、神前先生や西岡さんから、膨大な数あるデータから有益な情報収集を行うコツを、エコツアー参加の大学生も交えて和気あいあいと学びました。

さて、今年の1月には代表の西岡さんと新進気鋭の20代女性2人が「ベテランから若手への共同現場調査での情報収集と分析力の継承」と銘打って3人で旅立ちました。麗しき“美女と野獣”（オランウータン？）の旅かと思いきや、そこはウータンにご参加なされる“かしまし娘”、圧倒的な若さとエネルギーで西岡さんを圧倒、ツッコミ満載の旅となったようです。

彼女たちが何をどのようにベテランから引き継いだかはさておき、井下さんが「若手からも学びたい」とおっしゃってくれたように、共に学び合い、ボケとツッコミの絶えない活気溢れる会をこれからも続けていきたいと思います。助成プログラムの成果は、現在企画中の「パームプランテーション問題と泥炭地問題について伝える教材作り」などに生かしていく予定です。（石崎雄一郎）

【ウータン活動記録】

2016/11/19 グローバル人材育成(大学コンソーシアム大阪) （ゲストティーチャー：武田）
11/26 とよなか市民環境展（ブース出展：井下、武田）
12/6 南港桜小学校講義（ゲストティーチャー：武田）
12/10 パーム油学習会「アブラヤシ栽培における小農の役割と課題」（講師：神前、笠原）
12/15 常磐会学園大学（ゲストティーチャー：武田）
2017/1/9～1/19,24,2/24 インドネシア訪問（西岡、武田、近藤）
1/28 総会にむけて「今後のウータンの在り方を考える」ワークショップ
2/4,5 ワン・ワールド・フェスティバル出展
2/4,5,7 講演会「NGOが語る！熱帯林のリアルな現状～ボルネオの森林破壊と村人の暮らし～」（西岡、石崎、武田）
2/12 総会にむけて「今後のウータンの在り方を考える」ワークショップ
2/20, 23,24 JICA事業マネジメント研修(受講：武田)
2/25 ウータン総会
3/4 グリーン連合関西大集合（石崎、武田）
11/22,12/13,12/20,12/27,1/10,1/24,1/31,2/14,2/21,3/7,3/14 ウータンミーティング

People(43) FNPF/ジュルンブンのマネージャー・イサム

―俺たち、違法伐採したら、植林しなければならなくなる！森林は重要だよ！―

TPNP のジュルンブンにて(写真・文/Badman Nishioka)

「寡黙やなあ。イサム、もっと喋ってほしい」と言っても、にこっと笑ってぽつぽつと喋る。しかし、実行は必ずする。そんな男がイサムだ。タンジュン・プティン国立公園のジュルンブンのマネージャー。以前は違法伐採に従事していたと言う。この男を今年是非とも招聘して喋らせたい。

「いっぱい伐採してしまった。金もある程度を儲けた。一人前とは言わないが、9 万ルピアになった時は驚いた。だが、自分たちの住んでいる所を見ると、環境が悪く変わったなと思った。伐採の仕事は辞めだと。自分の首を絞めているみたいだから・・」と、夜が更けてから言う。

今はアグロフォレストリーと泥炭湿地の管理や農作物を作り、泥炭湿地の中に植林をもしている。イサムの子どもはすやすや寝たので、タオルをかけた。植林もみんなが知らないうちに実行しているのだろう。何種類の苗を植えているかと聞くと、詰まって「えーと、30 種類ほど。適地に植える予定だ」という。写真を撮っていたら、「やっぱりこの T シャツは嫌やなあ～」と言って裏返しにしだした。「監獄からのメッセージみたいだから・・」とイサム。そうや、植林地獄かもしれない！

2017 年 3 月

国立公園内ブグルエリアで今起こっていること

2017 年 1 月 9 日～19 日、私にとって 5 回目となる現地入り。今回は、西岡と近藤(み)と三人で向かいました。多くの学びや発見があった中で、是非皆さんにいち早くお届けしいたい事として、火災後の植生変化と、現地の環境教育について書かせていただきます。

現場に足しげく通うローカル NGO だからこそ見えてくる変化や気付き。火災後、Friends of the National Parks Foundation (FNPF)が他の様々なセクターや住民を上手く巻き込んで、活発に活動を展開している様子が伝われば幸いです。彼らと共に現場に居られる幸運に感謝しつつ…。

ガラムの海

ブグルは、いつも訪れるタンジュンハラパン村の対岸少し下流にある国立公園入口から一時間程歩いたところに位置する、FNPF が植林を進めてきたエリアです。ウータンのエコツアーとして私も植林を行いました。残念ながら 2015 年の大規模森林火災で大きな被害を受けましたが、Care for Tanjung Puting という新しい団体等を中心として、クマイの町に住む人達も盛んに植林活動を行って森林回復が目指されている、比較的アクセスの良いエリアです。

ここにほぼ毎日通っている FNPF スタッフはハドランさん。彼に案内してもらいながら、FNPF の小屋より奥のエリアについて火災後の植生回復調査を行いました。

樹種名をハドランさんに尋ねながら記録を付けていくうち、私はある違和感に気付きました。「これは？」「Galam〔ガラム〕」。「この木は？」「Galam」。「これも Galam？」「そうだよ。」…。白っぽい幹と笹の様な平行の葉脈、白みがかった緑色の葉とその葉先のピンク色が特徴的だなと認識できると、見渡す限り Galam ばかりが生い茂っていることに気付かされました。燃え残った木だけでなく、足元には Galam の芽がびっしり生えています。2～3cm の小さな芽から膝丈を超す程に成長しているものまで、様々な状態ではあるものの全部 Galam なのです。近藤にインドネシア語でヒアリングしてもらって分かったことは、Galam が火災後優位に立つ樹種だということでした。火災時の熱によって種が発芽するそうで、こうした特性は紙の原材料としてプランテーション栽培されているアカシアと同じなのだそうです。アカシアの植林用苗を作る時には鍋で種を煮てから植え付けるという話でした。

Galam に負けている植林した苗

ここでは Galam の勢力があまりにも強くて、FNPF が植林した苗も負けてしまい上手く育ちそうにないということです。Galam 達同士も激しく競合している様で、野菜の種を蒔いて暫く後の間引き前の様な状態である場所が多く見られました。

参加者 60 人規模の宿泊コンセルファーシ（環境教育イベント）

1/14(土)～15(日)、FNPF の事務所によく出入りしているアルバインさんが主体となって環境教育が開かれるというので、私達は先に上記調査を済ませて待ち構える格好で参加しました。アルバインさんは、様々な理由で学校を辞めてしまった中高生に勉強を教えている、冗談好きでフレンドリーな 30 代くらいの方です。FNPF は基本的にサポートに徹していました。火災直後 Care for Tanjung Puting 主催の大規模な植林イベントも同じ感じであったものと想像されます。

船にトラブルがあり当初よりも 3～4 時間遅れての到着でしたが、みんなトラブルには慣れていて、重い食料やキャンプを楽しむ為のギター等を担いで楽しそうにぞろぞろと到着しました。

参加者は 60 人！複数の学校から中高生、パンカランブンからアグリビジネス専攻の大学生、その教授、FNPF スタッフに加えて国立公園からも 2 名のスタッフが参加していました。これまでも FNPF の環境教育を何度か見て来ましたが、ここまで多様な人が多数参加し、FNPF スタッフ以外がそれぞれ主体性を持って活動している様子を見るのは初めてで、わくわくしました。

到着後はみんなテキパキと、食事作りやキャンプテント（木を繋いだロープにブルーシートを掛ける大胆な作り）設営、順に水浴びとそれぞれの作業に取り掛かりました。何人かに質問して驚いたことは、ここへ来るのは初めてや 2 回目という子が多かったことです。スムーズな団体行動に感心します。夜の暗い森の中、みんな輪になってランプを囲み夕食を取りました。

夕食後、FNPF リーダーのバスキさんが大学生を集めて Galam についての議論を始めました。前述の通り今ここは Galam の海です。しかし強調されるのは、アカシアやパームが外来種であるのに対して、Galam が在来種だという事です。更に、荒れた裸地から森林にうつり変わるという植生遷移の観点から、これはましな状態とも言える様です。荒地として有名な、イネ科のチガヤに似たアランアランという草で覆われた土地は、その状態が長く続き植林による森林回復も難しい。樹木が存在すると、その陰に草は生えず、更に落ち葉が堆積して他の様々な種の樹木が発芽の機会を得るそうです。しかし本当にこの Galam の海が他の樹木が育つ条件を創出できるのか、まだバスキさんにも分かりません。もし Galam を駆除するなら人手が必要ですが、抜いた Galam に用途が無いなら費用面で厳しい。Galam の活用アイデアとしては、船を作る際に木の繋ぎ目に(接着剤?)使うらしいとか、泥炭地保全の為にカナルブロッキング(水路堰き止め)の材料にする(水に強い?)らしいとか、消毒作用のあるアロマオイルとして有名なカユプティと分類学的に近いらしいという話を聞きました。今後は大学生の研究にも期待されるところです。

2015 年火災から 2017 年タンジュン・プティンの森林再生へ　　西岡良夫

【森林は死なない!　1%にかける生命力―焼けた根元から萌芽し、焼けた葉を落として新芽出る！】

2015 年 9 月18 日、タンジュン・プティン国立公園では泥炭地の森林で火災が拡大していた。オランウータン保護センターのパウリヌス君と FNPF（Friends of the National Parks Foundation）のメンバーと合流してジュルンブン地区で予定外の鎮火作業に加わる。8 月末から火災が発生し、泥炭湿地帯の森林へも火災が広がっていた。このジュルンブンは村から外れた川上にあり、バスキたちがアグロフォレストリーと環境教育の場にしたい構想を持っていた所だ。しかし火災は私たち後発組が去った後も鎮火できず、10 月初めまで続く。

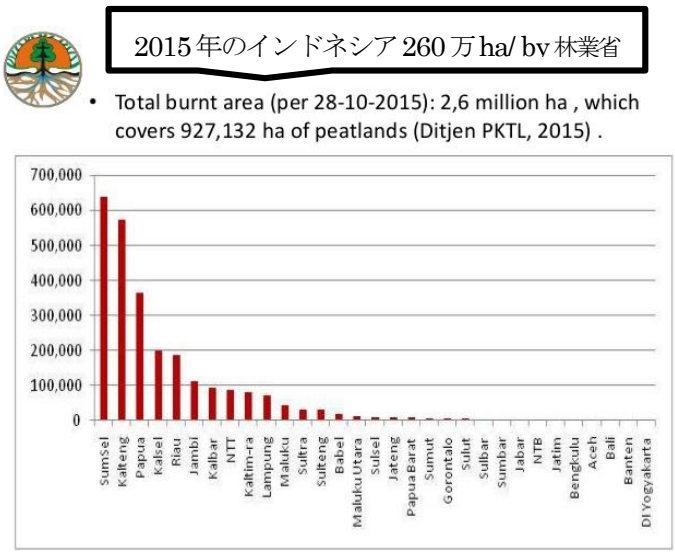
ここが鎮火する前に、今度は公園内のブグル、パダン・スンビラン地区が燃え出していた。5 ヶ月が経って雨が降り出して、やっと火災がなくなった。FNPF や村人たちが植えた 250ha のうち 90ha が燃えたという。

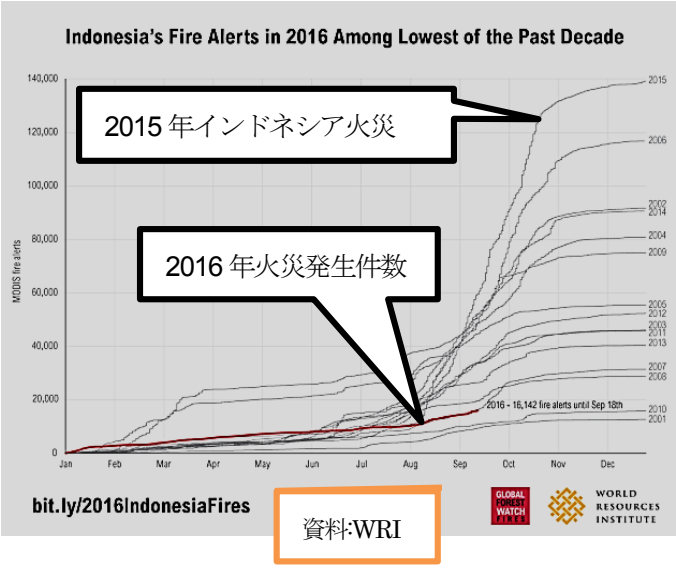
この 2017 年 1 月、近藤、武田さんとジュルンブン、ブグルでの森林再生の確認と、一部の火災発生の検証の作業を行った。クマイの FNPF 事務所に泊まった後、一路、ジュルンブンに向かう。ここは今年私たちが招聘しようとするイサムたちがアグロフォレストリー、森林再生に改めて取り組んでいる所だ。

2015 年に 260 万 ha の森林等が燃え、CO2 排出量も日本よりはるかに多い 16.5 億トンの被害を出したインドネシアでは、2016 年に雨も適度に降ったので、火災が少なくなったこともあり、タンジュン・プティンのあちこちでも緑色の森が回復し始めていた。ジュルンブンでも、マネージャーのイサム氏らが森林や泥炭湿地の状態を既に調べていて、ボランテイアハウスの前の草むらが元どおりに戻りだしていた。

［左・2015 年 9 月のジュルンブンの火災/右・2015 年 11 月ブグル地区の森林火災跡に植林を開始］

［下左・ジュルンブン泥炭湿地の火災跡 2016 年 1 月/右・2017 年 1 月、回復始める泥炭湿地の森林］





【火災から「吉」の泥炭湿地の森林再生へ、そして「大吉」のみどりの「絶滅危惧種が住める回廊作り」へ】

私たちは泥炭湿地へ行く。その奥は倒れそうな木が倒れてくるかも知れないので、初日は様子を伺いながら植林した所を確認して、約1年でどれだけ成長したか巻尺等で図る。翌日、泥炭湿地の森の一部に分け入る。イサム氏が私たちをサポートして、危険が無い所で状態を確認する。パイオニアの草本や小潅木があちこちに若芽を出している。焼けた木は根が死んでいなかったらしく違う所から萌芽し、既に1.5ー4m の高さになっている。

武田さんは「私は泥炭湿地の森林は復元してくるのと思っていたよ」とあっけらかんと言うが、昨年 1 月に一部の泥炭湿地に分け行った時に、バスキ氏ですら一部の倒れて根元まで真っ黒に焼けた木を見て、「このようなただれた木は再生が困難かもしれない」と言っていた。それが再生している。全くこんな再生が早いとは予想もしなかった。すごい生命力だ。森は簡単に死ななかった！だが大火災になれば、絶滅危惧種オランウータン、テングザル、ギボンたちが安全な所に逃げたように、生態系だけでなく村人たちの生活をも脆弱にする。だからこそ、イサムたちはこの焼けた森を再生させるために泥炭湿地に植林を始めた。広範囲の泥炭湿地の植林の例を余り聞いたことがない。「Trial and Error」の気持ちだろう。実行する中で失敗もあり、また何かを見出す。

2016 年から始まった再生計画。新たな泥炭湿地への植林と、焼けて完全に死んでいなかった樹木がミックスし、森の復元が出来るかもしれない。約 10 年かかる取組みへの挑戦。1 つの泥炭湿地で再生が進んだら、次の所との連携を図る森作りが出来る。ブグルは、伐採されて乾燥した森の再生の例だ。約 10 年で凡そ元の森と変わらない状態まで復元した（表紙の森）。既に実行例があるから、彼らは再生に取りかかれるのか・・。

ブグルの森も昨年 1 月には無残な焼け野原となっていた。雨が降り出した 2 月以降、見事な成長をみせてここでも 80cm-4mの高さまで伸びている樹木たち。植林より、焼けたが早く伸びた木もあるが、彼らは何時生命が絶たれるかもしれないから、植林は必要なのだ。大火災があれば全てがなくなる。これ以上の火災を止めねばならない。　泥炭湿地のこれ以上の開発は不要で、２次林や村落林を保全して行かねば、また大火災があれば対応出来ない。鎮火チームが消防体制を作るために各村で必要だろう。また泥炭湿地は乾燥が進んでいない状態なら、異常な火災が起きないだろうと、スンガイ・プトリ泥炭湿地で実感した。泥炭湿地の回復が重要な要素で、この実施が絶対必要と痛感した。

2011 年ブグルで 3 年目のニャトウが 3m、右）2017 年火災で焼けたが死んでない樹木の成長約

現場主義ならでは

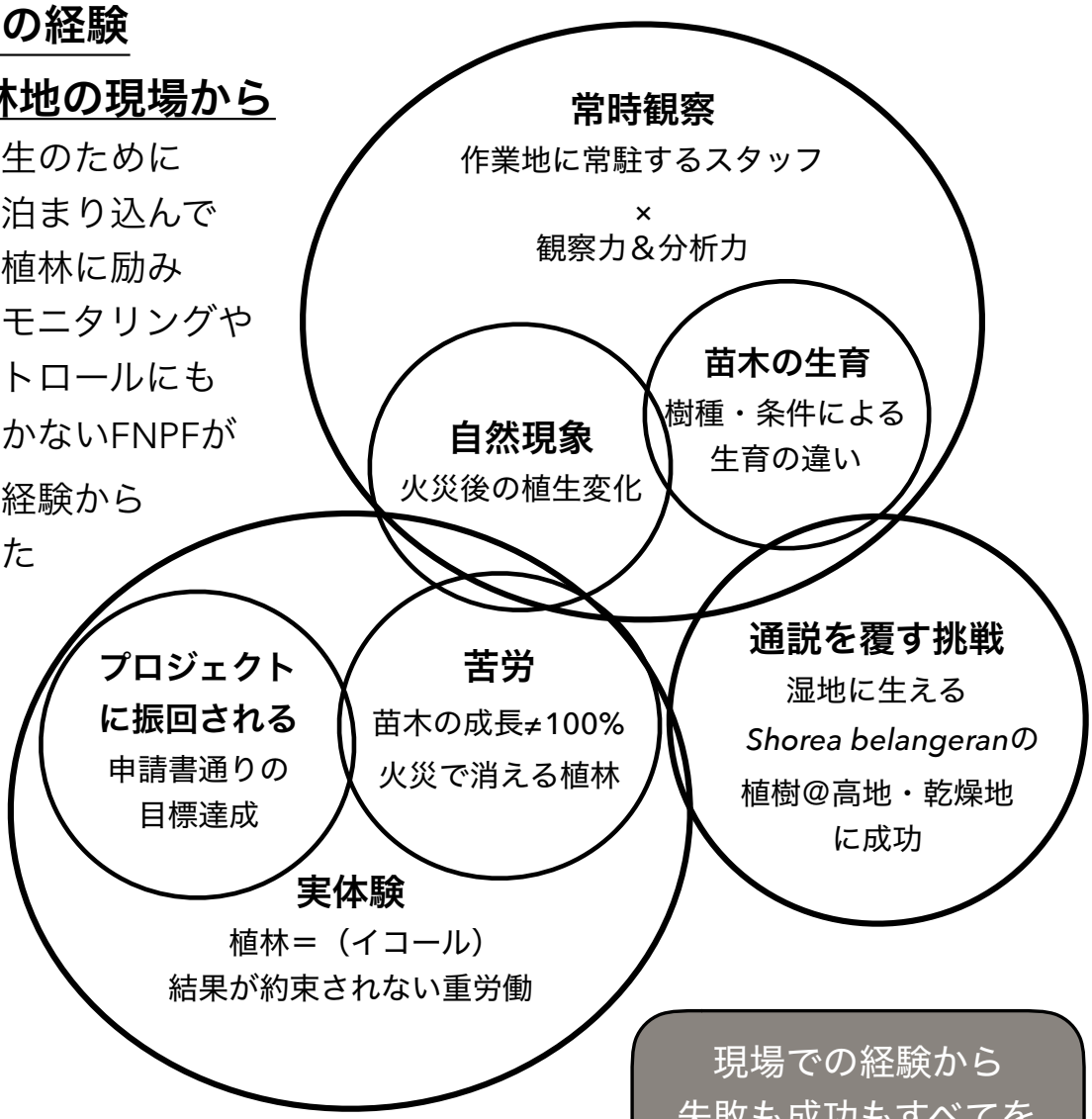
2017年3月／missy

超・現場主義ローカルNGOのFNPFだからこその強み・弱みがある。彼らの活動に耳を傾けてみると、彼らならではの活躍、そして外部者である私たちの役割も見えてくる気がする。

FNPFの経験

～植林地の現場から

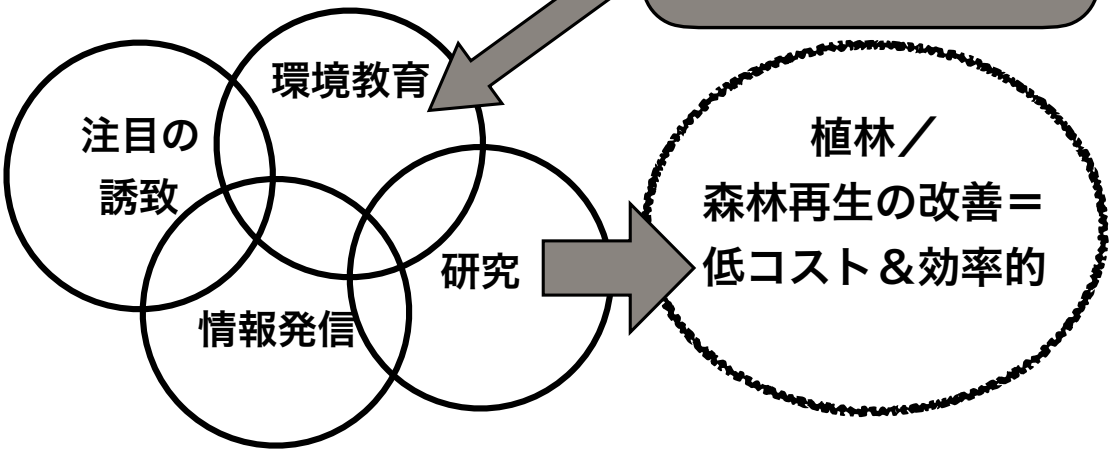
森林再生のために
現場に泊まり込んで
日々、植林に励み
事後のモニタリングや
消防パトロールにも
手を抜かないFNPFが
現場の経験から
得てきた
こと。



現場での経験から
失敗も成功もすべてを
伝えること・・・
それは、FNPFの大事な
役割のひとつ

外部との協働で叶えたいこと

現場で起きている／取り組んでいること
失敗も含めたすべてが研究材料となる。



ウータン・ニュース

FNPFのCEO・バユさんと面会

2017年1月中旬、FNPFの設立者兼代表であるバユさん（本部のバリ事務所で勤務）が、カリマンタンを訪問しました。１週間弱の滞在でジュルンブンでの新プロジェクト（ボランティア受入強化のための施設建設）の視察・打ち合わせや、お客さんとして連れてきた主要ドナーやボランティアのもてなし（＝観光）をこなすという、日本並みに詰まったスケジュールをこなすバユさん。その合間を縫って、ウータン（西岡、武田、近藤）とお話しする時間をいただきました。ウータンメンバーが複数でバユさんと落ち着いて話す機会は、今回が初めて。まずは関係構築から…といきたかったのですが、そもそもバユさんと話す時間がとても限られていたことから、取り急ぎ、消防資材輸送の進捗状況とそのためにウータンが集めた寄付金についての話題を共有し、共通認識を図りました。
数日間だけですがバユさんと行動を共にした所感としては、「団体の代表として、先見的にビジネス的な視点を交えながら経営・運営を真剣に考えている方」でした。

（左）日本の消防ホースを見ながら情報共有：左から２番目がバユさん　（右）FNPF集合写真

コラム

湿った森で見た、火災の爪跡の小ささ

西カリにある、莫大な量のCO2貯蔵庫である泥炭湿地。Nさんに同行して訪れたスンガイ・プトゥリについて私が知っていたのはそれくらいだった。現場入りすると、少し貧弱だけどまだ豊かな森。大きく価値のある材木が取り尽くされた最近になって、やっと地元住民による小規模な伐採がなされているだけ。森の入口が数haだけ燃えていた（昨年の乾季に起きた火災）が、私の知るタンジュン・プティンの火災跡とは違う点がいくつか見受けられた。燃えたのは入口のみ（人の手が多く入り乾燥化がより進んでいたのだろう）であること、表層の泥炭は燃えたものの砂地が露わになるまでは至らず１mの泥炭層が残っていること、泥炭層がより深く湿っている森の奥には引火せずに自然消火していること。同じ泥炭湿地でも「湿った森」はこうも火災の影響が小さいのかと驚きを隠せなかった。

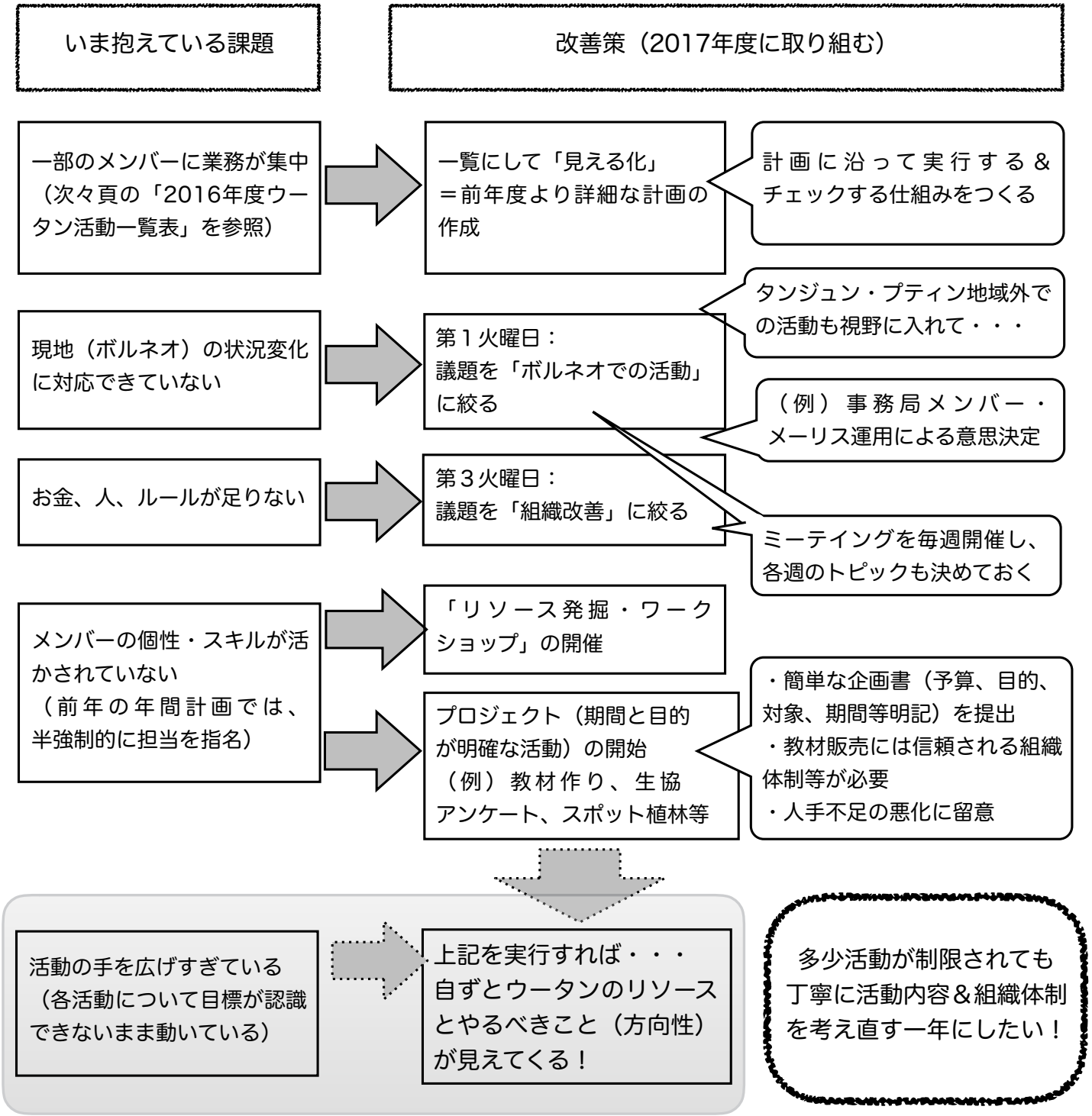
（左）入口だけが燃え、奥には森が残る　（右）湿った／乾いた泥炭。後者は火災の燃料になる

2017 年度総会の報告（まとめ）

2017 年 2 月 25 日(土)@大阪・梅田で開かれたウータン総会では、昨年と同様、総会に向けての事前ワークショップ等を踏まえての発表・議論が行われました。事前準備を企画したのは、2015年インドネシア大規模森林火災以降から積極的に新企画や団体運営を担ってくれている、
さん。参加者の顔ぶれとしては、普段の事務局会議メンバーに加えて顧問の大西裕子さん（元・弁護士）を迎えての開催となり、リスクヘッジを含んだ活動の進め方などの話題にもおよびました。

2016 年度活動報告と2017 年度活動計画

2016年度の反省として年間活動計画の一部が実行されなかったことを受け、現状の課題分析の発表と改善策の提案が行われました。（会計報告は修正が必要となったため、次号で報告いたします。）



（左）懇親会での集合写真

（右）総会にて、武田より課題と改善策の発表

プロジェクト案①
教材作り

パームプランテーション問題と
泥炭地問題について伝える教材作り

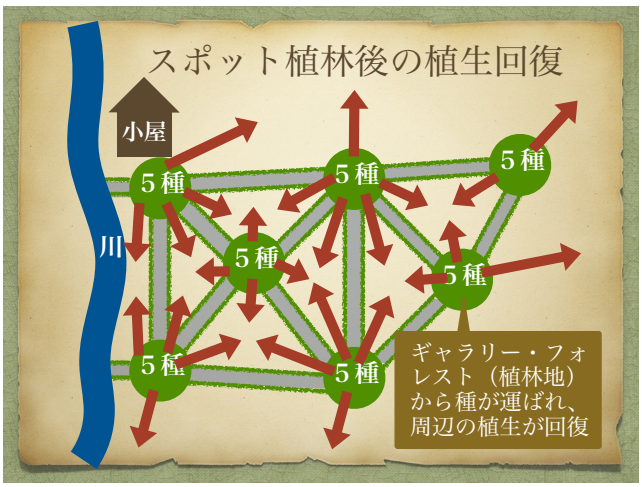
○対象：高校生（次年度以降、さらに内容をかみ砕いて対象年齢を下げる）
○内容：ムービーとワークショップ手引き
○スケジュール（案）：2017 年 5 月中にムービー作成、今年度中に高校で一度は実施
○目指す方向（ブレーンストーミング中→今後議論を深めて焦点を絞る）：
・仲間を増やす
・消費の在り方を見直す
・より多くの人に広める
・企業を動かす
・寄付を集める
・エコツアー参加者を増やす
・販売ツールとして会の収入に繋げる、等々…

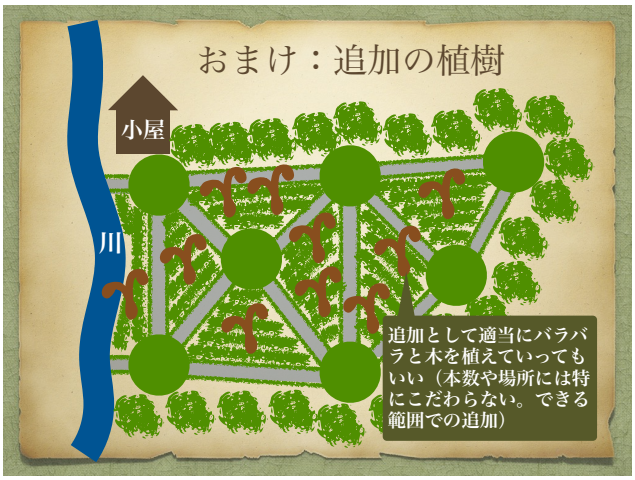
協力者・
アイディア出し
募集中！！

プロジェクト案②
スポット植林（仮）

植林を「片っ端から植える」から賢いデザインへ
～燃えた泥炭湿地の森林回復・New方法論

大火災で再生困難になった泥炭湿地の”節約”重視の森林回復方法。詳細はウータン会議まで！





2016年度ウータン活動一覧表

活動	担当（コア）	関係者（サブ）	2016年2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2017年1月	2月	3月
ファンドレイズ																
地球環境基金	石崎、西岡	近藤														
地球環境日本基金	西岡、近藤、石崎															
真如苑／協議会	石崎、武田、近藤、西岡	奥村、井下、笠原、神前														
火災対策費用募金	石崎、近藤、井下	藤原、西岡														
消防ホース＆ポンプ	石崎、西岡、近藤、武田、藤原、加納	神前、米澤、井下、前川														
JICA	西岡															
イオン	武田、西岡、石崎、近藤	神前														
イベント																
パーム油学習会		（講師）鈴木さん、神前、笠原														
スタツア説明会	西岡、近藤、武田															
エコツアー	石崎、近藤	神前、武田、西岡														
現地訪問の受け入れ	近藤	石崎、西岡														
ワールドエキスポ																
現地報告会	武田、石崎、神前、藤原															
豊中市環境展	井下、武田															
ワンフェス（ブース）																
キャラバン（ワンフェスのプログラム含む）	石崎、橋本、大谷、武田、近藤、西岡															
外部セミナー・会議等　への参加																
伊勢志摩サミット	石崎、加納															
持続可能な消費ネット																
RSPO	石崎、武田															
ITTO	西岡															
ワンフェス for Youth	石崎															
環境省とNGOの意見交換会	石崎															
消費から持続可能な社会をつくる市民ネットワーク（幹事団体）	石崎															
講演・WS・取材等の　受託																
毎日新聞取材	石崎															
みのおFM電話インタビュー	石崎															
関学経済学部	石崎															
近畿の環境団体情報交流会	石崎															
エコネットカフェ	石崎															
龍谷大学	石崎															
JICAセミナー	石崎															
コープこうべ	石崎															
シニア自然学校	石崎															
ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ人材育成講座	武田															
あどぼの放課後	武田、近藤	石崎、中井さん														
南港桜小学校出張授業	武田	石崎														
常盤会学園出張授業	武田	石崎														
三条ラジオカフェ出演	武田、石崎															
コミュニケーション																
会報誌	米澤															
ウェブサイト	加納、橋本															
ドキュメンタリー作成	石崎、中井さん	武田、近藤														
サイボウズ導入	加納															
運営																
総会	武田、近藤、西岡、石崎	藤原、井下、神前、加納、橋本														
会計（助成金以外）	井下															
研修・セミナー等参加																
JICA事業マネジメント研修	武田															
アブラヤシ研究会	石崎、武田、近藤、笠原															

2017年3月

ワンフェスと3ヶ所セミナーについて

2017年2月4日(土), 5日(日)、ワンワールド・フェスティバル（ワンフェス）に今年も参加しました。また、今回は当初現地メンバー（Friends of the National Parks Foundationのイサムさん）をゲストに招いてのセミナーを企画していたので、せっかくの機会を活かそうと、ワンフェス開催地の大阪だけでなく5日(日)京都, 7日(火)東京でもセミナーを行いました。

大変残念なことに、イサムさんはマラリアを発症してしまった為、今回来日することが出来ませんでしたが、代わりにムービーを作成し、1月に渡航したメンバーから現地報告を行って、セミナーは予定通りの日時で実施されました。お陰様でセミナー参加の延べ人数は100人と大盛況となりました。お忙しい中ご参加下さった皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。

ワンフェスについて

ワンフェスは今年24回目の開催となり、2日間の合計来場者数は25,000人だったとのことです。ウータンは今年も大阪市北区民センターの2階会場にブースを構え、熱帯林が破壊されている現状や、その原因であるパームプランテーションとその影響、そこで生産されるパーム油と私たちの暮らしの繋がり等についてお伝えしました。

以下、井下祥子より今回のブース内容についてご報告いたします。

足を止めてもらうにはクイズもいいかも、と今回は熱帯林クイズをやって見ました。

Q1.熱帯林がなくなると？

① 温暖化が進む ② 涼しくなる ③ 同じ

（異常気象がひどくなるかどうか、の方が適切という意見も参加者から出ました）

Q2.熱帯林の生物は、日本とくらべて

① 少ない ② 同じ ③ 多い ④ すごく多い

という ウータン読者には初歩的な問題から

Q3.熱帯林でガンの薬が採れる ウソ？ホント？

というちょっとディープな質問に。

「熱帯林は、気候を穏やかにして異常気象を防ぎ、薬の原料などの貴重な資源を与えてくれる」と、日本の私たちにとってのメリットを認識してもらう設問です。その上で、熱帯林がアブラヤシプランテーション開発で失われ、オランウータンなども絶滅の恐れがあることを写真パネルで伝えます。

最後の質問。「そうやってつくられた油を使っているのはどれ？」

ラーメン、アイスクリーム、ポテチ、チョコなどのパッケージから選んでもらいます。
おとなも子どもも、真剣に考えて「ラーメン？」「ポテチ！」「全部」
色んなやりとりをしながら、熱帯林、アブラヤシと私たちの暮らしとのつながりを感じてもらえていたらうれしいです。最後に、「パーム油を使っていない、純国産のポテトチップスがこれです」とコメ油のポテトチップスを見せると 買っていかれる方もかなりありました。

新たな試み！ドキュメンタリームービー『森をふたたび』

石崎雄一郎による企画として以前から準備を進めていたものでしたが、この度イサムさんが来日できないというハプニンングを受けて、現地の声を届ける為にインタビュー映像が豊富なショート版を急ピッチで作成しました。

作成していただいたのは、ドキュメンタリー映像作家の中井伸介さん。中井さんは 2015 年のエコツアーにもご参加いただき、2016 年 8 月末～11 月初旬 現地にて映像を撮り溜めしていただきました。インタビュー翻訳は坂井美穂さんや近藤美沙子、ナレーション原稿は主に石崎が作成し、私(武田)が読み上げを担当しました。

大慌てで作成した 17～18 分のムービーでしたが、期待以上のご好評を会場の皆さんから頂くことができました。アンケートや直接頂いたお言葉を一部ご紹介します。「現地の様子がよく分かった」「過去違法伐採に関わっていった彼らが、今は森林再生に尽力しているという事に感動した。」「彼らのリーダーであるバスキさんが、学歴は関係ないと語っていたお話が良かった。」

今、現地で起こっていることは何なのか？失われた森を再生させるために植林を続ける彼らの姿。大変な植林作業の経験に基づく「木をきるな！」という言葉の重み。映像の力を改めて認識し、事務局ではこのようなムービーとワークショップ手引き等をセットにした教材作りに今後取り組みたいね、という意見が出ています。

このムービーをご覧いただける機会をまた設けたいと企画中ですので、まだご覧になっていない方は是非お越し下さいませ。

セミナー内容

ムービーの後は、西岡良夫と私から 1 月の渡航報告として現地の様子をお伝えし、石崎（東京は JATAN の中司喬之さん）からパーム油と私たちの暮らしとの繋がり、賢い消費者を目指して実際に出来ることをご紹介した上で、3～6 人に分かれてディスカッションを行いました。

西岡は、3 ヶ所で微妙に発表内容が異なりますが、

多くの写真を皆さんに見ていただきながら、2015 年の大規模森林火災と実際に参加した消火活動の様子、インドネシア政府の対応等にも触れた上で、1 月に見られた植生回復(火災後)の様子を発表しました。

私は、パームプランテーションに関する基礎的な内容と、プランテーションが無秩序に拡大することによる様々な悪影響、とりわけ泥炭地開発と火災の関係、この無秩序な拡大の背景として私達の「いつも、安く、たくさん欲しい」というニーズがある事について発表しました。

中司さんや石崎からは、パーム油が身近なあらゆる製品に使われていること、その 80%が食品であること、持続可能なパーム油のための円卓会議(RSPO)や、新たな取り組みとして『プランテーション・ウォッチ』の紹介がありました。
http://plantation-watch.org/

ディスカッション

大阪では、「現地でこんなに大変なことが起こっていると初めて知った。」という感想や、「ウータンや現地 NGO が植林している土地はどのような方法で取得された土地なのか？」「どんな樹種を植えているのか？」という具体的な質問等がありました。

京都では、「一番良い方法は油の使用量を減らすことではないか？その為にはライフスタイルを変える必要がある。」「パーム油が多く消費されているファーストフード店は若者にとってたまり場の要素が強いのかもしれない。だとすると、それに代わる別の場づくりが必要。」「商品を買う時に原材料を見ることは今すぐできること。しかしそもそも表示やマークがついていなければ選ぶことができない。より良い表示を消費者側から求めていく必要がある。」といった意見が出されました。

東京では、ウータンとも付き合いの長い NGO の方々が多く足を運んで下さいました。また、企業に勤められている一般の方から地方で市議をなさっている方、教師の方など幅広くお越しいただけました。「今だけ金だけ自分だけという風潮をどう打破するか？」「消費者の認識が低いことが根本原因。」「パーム油の認識を草の根的に広げることが大事。」「中間業者によるマージンが多すぎると感じている。フェアトレードのような考えが重要。」等活発な議論が繰り広げられました。

セミナー後、東京の NGOs と

インドネシアの森林火災―泥炭地とアブラヤシ―

神前　進一

赤道直下のインドネシアにはオランウータンやテングザルなどの多様な野生生物が住む広大な熱帯林がひろがり，そこは森と共に暮らしてきた人々の生活の舞台でもあった。その森林では商業伐採（かつては大半が違法伐採）が進み，アブラヤシやアカシアのプランテーションへと大規模に転換され破壊が進んでいる。2015 年9～10 月にスマトラ島とボルネオ（カリマンタン）島を中心に今世紀に入って最大規模の森林火災が発生し，四国の面積の 1.4 倍の約 260 万 ha の森林が焼失した。熱帯雨林では自然状態でこのような大規模火災が発生することは考えにくいが，今回の火災の多くは泥炭地がパーム油の原料となるアブラヤシ農園や紙パルプ原料のアカシア植林地に転換された周辺で発生している。泥炭地とは森の木々からの有機質が未分解のまま水分を多量に含んだ地中に堆積したもので，深さは 20m にも及ぶことがある。泥炭湿地はインドネシアのスマトラ島東部やカリマンタン島南部に広く分布するが，農業利用されるようになった歴史は新しく，1980 年代後半から排水路を掘って乾燥化したのち，アブラヤシやアカシアの大規模プランテーションに転換されてきた。

泥炭地は排水されて乾燥化すると，地下の堆積物が自然に分解して多量の CO2 を発生するとともに，森林火災が多発して大量の CO2 を放出することになる。国際エネルギー機関は化石燃料燃焼によるインドネシアの CO2 排出量を年間 4.36 億トン（2014 年）で世界 13 位としているが，インドネシア政府は 2011 年に中国，米国に次ぐ世界 3 位の CO2 排出国であるとの報告書を発表した。それによると 2005 年の排出量は 21 億トンで，78%は「土地利用・土地利用転換・森林」からの排出，つまり森林伐採・火災からの排出量（8.4 億トン，41%）と泥炭地の破壊・分解による排出量（7.7 億トン，37%）で，泥炭地に由来する排出量は世界の 58%を占めるとされる。この結果をもとに当時のユドヨノ政権は原生林と泥炭地の新規開発を凍結する政策を打ち出した。2015 年の森林火災による CO2 排出量は 9 月と 10 月で 16 億トン余りと推定され，同期間の米国と欧州全体を合わせた排出量を上回った。

泥炭地での火災は地下の泥炭層を伝ってくすぶりながら燃え広がるため，一度火が付くと鎮火が難しく，また大量の煙と有害物質を発生する。これが煙害（ヘイズ）と呼ばれ，2015 年の煙害は「21 世紀最大の環境犯罪」（2015 年 11 月 5 日付の米科学誌 Nature）と言われる。この煙害は国境を越えてマレーシアやシンガポールにも達し，シンガポールでは 2 日間にわたり全ての小中学校が休校となり，インドネシア国営ガルーダ航空だけで 400 便以上が欠航するなど，市民生活や経済活動にも大きな影響を及ぼした。この火災による健康被害も深刻で，インドネシアだけで 6900 万人が有害な煙を吸い，50 万人以上が呼吸器系疾患を患ったとされ，米ハーバード大学等の研究では東南アジア 3 か国で 1 万 300 人が早死にしたと推定している。また野生生物への影響も深刻で，世界でカリマンタンとスマトラにしか生息しないオランウータンの

約 3 分の1が火災の危機にさらされ，カリマンタン各地で火災のために焼け死んだオランウータンが報告されている。

2015 年の大規模森林火災は，強いエルニーニョ現象のために 3 か月以上ほとんど雨が降らなかったことがその背景にあるが，Nature 誌が「今世紀最大の環境犯罪」と呼んだように人為的に引き起こされた犯罪なのである。インドネシアはマレーシアを抜いて世界最大のパーム油生産国となったが，アブラヤシの栽培地はスマトラ島とカリマンタン島の泥炭地に集中している。アブラヤシ農園企業にとっては，森林火災で焼失後の土地は，整地の手間が省け肥沃度も増すため，新しくアブラヤシを植える場所として最適で，そのため現地の住民に金を払って栽植予定地の森に火を付けさせているとの報告も多く，一方で農民を組織して火を付けさせ燃やした土地を高い値段で売るローカルエリート層の存在も指摘されている。

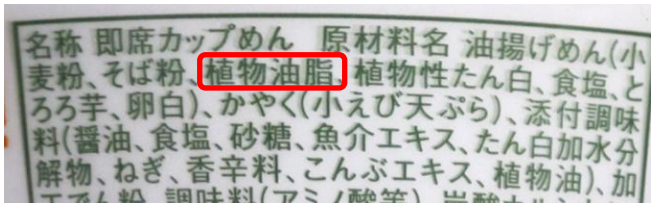
こうした事態に対し，2015 年の森林火災を機にインドネシアのジョコウィ大統領は泥炭地開発の全面禁止とアブラヤシ新規開発の 5 年間凍結を発表するとともに，大統領直属の泥炭復興庁（BRG）を設立し排水路を堰き止めて泥炭地の水位を上げて泥炭地を回復するなどの政策を打ち出している。また火災を起こしたプランテーション企業に膨大な額の賠償を求め，乾燥化した泥炭地の回復を命じ，森林火災を繰り返さないように監視と取り締まりの強化も進めている。これらの政策の成果とエルニーニョ現象の終息により，2016 年の森林火災発生件数は前年の 5 分の1程度で推移したが，2017 年は乾燥した気象条件が予測され，2015 年の大火の再来が懸念されている。

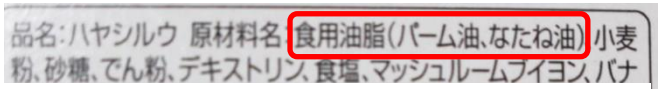
一方，欧米でのパーム油に関する消費者意識の高まりを受け，アブラヤシプランテーション企業や食品や油脂・洗剤等のパーム油巨大企業は，RSPO（持続可能なパーム油のための円卓会議）に参加して認証を得たパーム油の生産・調達・販売を進めてきた。さらに近年はより厳しい NDPE（森林破壊ゼロ，泥炭地破壊ゼロ，労働者の搾取をしない）基準を宣言する巨大企業も増加している。

RSPO の持続可能なパーム油認証ラベル

インドネシアの森林火災やアブラヤシ農園開発に伴う問題は，遠い国の話ではなく，私たちも知らないまま加害者になっているかもしれないのである。日本で私たちはさまざまな製品に含まれるパーム油を年間 5kg 以上消費しているが，まだまだパーム油についての情報が不足し，どの製品にパーム油が使われているかもほとんど知ることができない状況にある。

「ウータン・森と生活を考える会」が 10 年近く支援してきたインドネシア・中カリマンタン州タンジュンプティン国立公園とそれに隣接するハラパン村でも，泥炭地を破壊してアブラヤシのプランテーション開発が進み，オランウータンなどの野生生物も生息地が失われて危機に瀕している。こうしたなかで地元 NGO の FNPF（Friends of the National Parks Foundation）や村人の手により，2015 年の森林火災で焼失した森林を回復するための原生種の植林が進められ，森林火災の消火体制の確立も図られつつある。

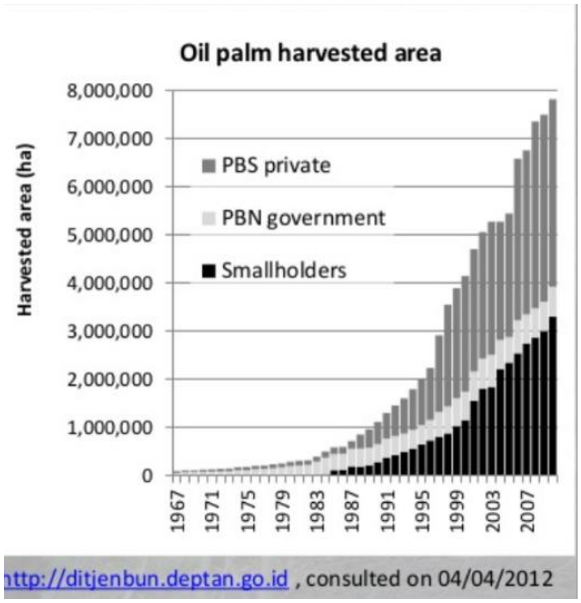




最近は日本でも植物油脂と一括した表示からパーム油，ナタネ油などを特定した表示が増えてきた

パーム油学習会第 6 弾報告「アブラヤシ栽培における小農の役割と課題」

12 月 10 日（土）に大阪梅田の聖パウロ教会で行われた今回の学習会では、近年増加が著しく無視できない存在となってきた小農によるアブラヤシ生産の状況について、大阪大学で教官をされていた神前進一さんと、元小学校教諭で「ウータン・森と生活を考える会」の古くからのメンバーである笠原英俊さんにお話をしていただきました。 最初に神前さんから、「小農（smallholder）」の定義など基本的なことと小農の増加の背景などを説明していただきました。「小農」とはどんな人たちをさすのか、さまざまな説明があるのですが、おおむね、小農とされる人たちに関する統計では、一農家あたりの栽培面積はほぼ 2 ヘクタールほどなので、だいたい 2 ヘクタールほどのアブラヤシ農園を所有している人というぐらいでイメージすればいいのではないかとのお話でした。



インドネシアの部門別アブラヤシ収穫面積の推移

（黒い部分が小農）

そして、この小農のアブラヤシ生産面積の割合は、インドネシアで 2010 年には 4 割まで増加し、マレーシアでもアブラヤシ栽培面積の 40％を占めており、増加傾向にあります。インドネシアではスマトラ島で多く（小農の栽培面積 300 万ヘクタールの 80％がスマトラで、カリマンタンは 15％）、とくにスマトラ島のリアウ州では 2005 年以降の増加が目立っています。

ただし、アブラヤシの果実は 24～48 時間以内に工場で蒸して圧搾してパーム油を抽出する必要があり、この工場の稼働には最低でも３０００ヘクタールの栽培面積が必要となるので、小農であっても、近くに大規模なプランテーションの工場がなければ、アブラヤシの栽培で利益をあげることはできません。小農のアブラヤシ栽培も、大規模プランテーションに依存した存在で、アブラヤシの収穫後すぐにプランテーションの工場に運ばなければなりません。

ハラパン村の周辺のジュルンブン区の個人農地に植えられたアブラヤシ

最近ではウータン・森と生活を考える会がかかわっているハラパン村の周辺でも、急速に小農のアブラヤシの植栽が進んでいます。また、ハラパン村に隣接するブダウンやクマイスブランのジャワ島からの入植者の村では、小農によるアブラヤシ生産がうまくいき、ハラパン村と比べても急速に豊かになり、その差は歴然としています。

クマイスブラン道路沿いの小農アブラヤシ栽培　（2016 年 8 月）

ただし、小農といっても大きく二つに分けられます。アブラヤシを搾油工場に持ち込むこと以外は、自分で独立してやる小農と、プランテーション企業と結びつきをもったプラスマとよばれる小農がいます。

もともと、アブラヤシ生産については、貧困解消のための小農育成という国の政策があり、また、マレーシアのサラワク 州では先住民が権利を持っている土地を政府機関に預けて、プランテーション企業と合弁して、利益を配分してもらうというタイプもあります。

自分でアブラヤシを生産するのではなく、企業などに土地を提供して、地代だけを受け取る人々、自分もアブラヤシ生産には携わるが、自分の土地ではなく、企業が管理している農園で働き、地代と給料を受け取る人々、自分の土地で働くが、企業などの強い統制を受けている人々、近くにプランテーションと搾油工場ができたので、自分でアブラヤシの生産をはじめた人などさまざまなタイプがあります。

マレーシアでの小農のアブラヤシ栽培では FELDA（Federal Land Development Authority）の存在が大きく、また、最近 FELDA 自身も大きく変わってきています。かつて、連邦土地開発庁として発足した FELDA は、2003 年には FELDA　Holding 社として公開会社化し、世界最大のパーム油生産会社となりました。現在では農園部門から精製・流通・油脂化学工業など国内外で川下部分まで垂直統合した巨大企業体となっています。1960 年にアブラヤシ栽培などの入植者を募集し、入植者をきびしくコントロールして、1990 年までに 119,300 世帯の入植を完了しましたが、1991 年からは募集を停止しました。小農を育成するということでは、成功したのですが、労働力は入植者だけでは足りず、インドネシア人の労働者を雇っており、その数は入植者数をこえています。

笠原さんは、同志社大学などで行われているアブラヤシ研究会に何度も参加され、プランテーションでは「弱くていじめられている農民」というイメージだった小農の状況が大きく変わっているのでないかと気づき、いろいろと調べられて、今回はアブラヤシ研究会のメンバーの報告などをもとにして、お話をしていただきました。国営のアブラヤシ農園企業などいくつかの農園の状況を報告していただきましたが、そこでは、従来の先住民などの農民は土地を手放して、アブラヤシで利益が上がることに気がついた農園の職員や教師・公務員・政治家など他の職業の人々、他の地域から来た人々が土地を買い入れて、人を雇うなどしてアブラヤシ生産に参加し、かなりの収益をあげている状況にあること（インドネシアの大学のベテランの先生の給料より多い）。ただし、以前はアブラヤシはあまりもうかるものではなかったのが、アジア通貨危機でインドネシアの通貨が下落したことにより、パーム油の値段が急騰したことで、利益が上がることようになり、アブラヤシの生産が急拡大し、小農がアブラヤシ生産に参加するようになったことなどが 4 ヵ所の地域についてお話ししてください

ました。

そして、神前さんが他の作物に比べて圧倒的に高収入が期待できるため小農のアブラヤシ栽培はどんどんふえているが、企業のプランテーション農園に比べ単収が半分～6 割程度と低いこと、アブラヤシの植え替えの時に 3 年ほど収入が途絶えてしまうので、それを乗り越えるのが難しいこと、アブラヤシ農園企業に土地を提供したものの、配当金がなかなか支払われずトラブルになっている事例もあること、大企業よりも小農の方が手軽に開発できてしまうために森林の破壊などをすすめてしまう、などの問題点を指摘されました。

質問や意見も活発に出され、インドネシアの経済を考えるときには「華僑」（中国系の人々）のことも考えなければならないのではないかとの意見も出されました。　　（米澤興治）

パーム油に発がん性？

神前進一

世界で最も多く消費されている食用油のパーム油は，生産過程で森林や泥炭地の破壊，温室効果ガスの排出，労働者の搾取や人権侵害などを引き起こすとして批判が高まりつつある。これに加えヨーロッパではパーム油の安全性を懸念した動きが生じている。

2016 年 5 月にヨーロッパ食品安全機関（EFSA）がパーム油の発がん性を公表したことに端を発する。パーム油は精製過程の最終段階でオレンジ色と独特の臭いを取り除くために 240～260℃で処理されるが，これによりグリシドール脂肪酸エステル（GE）という物質が生成され，これが発がん性を持つと結論付けられた。パーム油に含まれる GE は他の植物油に比べて段違いに多く，次に多く含まれるコーン油の 7.5 倍に達する。粉ミルクだけで育つ乳児は健康に影響を及ぼさないとされる量の 10 倍の GE を摂取するため最も危険性が高く，乳幼児と子どもは平均的な量の摂取も避けるべきで，成人では多量の摂取は健康上の懸念を生じさせると，摂取の制限が奨励された。

これをうけて欧米の朝食に欠かせない Nutella というチョコレート風味のスプレッドなどを製造するイタリアの菓子メーカーFerrero 社は，自社製品中のパーム油は GE を生じさせない 200℃以下で処理しているため安全とのキャンペーンを 9 月以来テレビコマーシャルや新聞紙上で大々的に展開している。イタリアでは EFSA の決定をうけて小売り最大手の Coop が「予防措置」として全ての自社ブランド製品からパーム油をボイコットし，最大の食品会社 Barilla 社もパーム油使用を中止し，「パーム油を含まず」と包装に表示している。

パーム油中の GE の存在は 2009 年にドイツの連邦リスク評価機関が初めて明らかにし，日本でも花王が食用油エコナの特保指定を取り下げるなどの動きがあった。しかし日本も米国もトランス脂肪酸の摂取を制限し，パーム油が代替油として消費が伸びている。パーム油には GE だけでなく，酸化防止剤の添加物 BHA，BHT の発がん性も危惧されている。健康には油を控える食生活への転換が必要と言えるだろう。

参考資料：Nutella maker fights back on palm oil after cancer risk study. *Reuter* 2017.1.11

Nutella manufacturer: Palm oil in product is ‘safe’, despite cancer concern. *Mongabay* 2017.1.15

World Forest News　世界の森林ニュース

2016 年 12 月～2017 年 2 月　　by S.Kohsaki

ブラジルアマゾンの森林破壊が前年より 29%増加

アマゾンの熱帯雨林の約 3 分の 2 を占めるブラジルアマゾンの森林破壊は，NASA 衛星画像の分析によると過去 8 年間で最大となり，前年より 29%増の 7989 ㎢で 2012 年に比べると 75%増加した。最大の原因は Cargill 等のアグリビジネスによる大豆生産の拡大。［Mongabay 11 月 30 日ほか］

世界の森林関連の汚職は年間 290 億ドルと Interpol

INTERPOL（国際刑事警察機構）の報告書で世界の森林部門でのさまざまな形での汚職による損失は年間 290 億ドルにのぼり，森林保護のための国境を超えた協調した法律の施行が重要であると指摘している。［Mongabay 12 月 8 日］

インドネシアで泥炭地の開発全面禁止法が発効

ジョコウィ大統領による泥炭地開発全面モラトリアムが成文化され発効した。この禁止措置は泥炭地の新規開発だけでなく既存のコンセッション内の開発禁止も含むが，政府が全国の泥炭地の地図化とゾーニングを完了するまでの期限付きであるなど，効果を疑問視する声も多い。

［Jakarta Post 12 月 9 日ほか］

北九州市の石鹸メーカーが効果的な森林消火剤開発

北九州市のシャボン玉石けんは北九州大学と共同で東南アジアの泥炭地火災の消火に効果的な石鹸から作る泡沫消火剤の開発に成功。少量の水で十分な効果が得られることを中カリマンタン州等で確認。［日本経済新聞 12 月 22 日］

世界の違法伐採は減少の兆しが見られないと報告書

40 人以上の科学者らによる包括的な違法伐採の報告書は，世界で取引される熱帯木材の 3 分の 1 が違法伐採によるもので，規制の抜け穴と組織的犯罪ネットワークが原因で，年間 1520 億ドルに達し，世界の ODA 総額を上回るとしている。

［Mongabay 12 月 30 日］

インドネシアで先住民の村に初の土地権付与

ジョコウィ大統領は公約に従い 9 つの先住民コミュニティに初めて慣習林の管理権を与えた。2013 年に憲法裁判所が先住民の慣習林を国の支配から切り離す歴史的判決を出し，これを実現する最初の政策だが，全国 820 万 ha の先住民慣習林に対し 13100ha にすぎない。［Mongabay 1 月 4 日ほか］

タイのローズウッド密伐採と密輸は衰えを知らず

2013 年にワシントン条約付属書Ⅱに指定されたタイローズウッド（紫檀）はラオス，ベトナム，カンボジアで枯渇し，タイの国立公園等の保護林に残る紫檀は，密伐採されカンボジアに密輸された後，偽造された輸出許可証で中国へ活発に輸出されていると EIA 報告書。［Mongabay 1 月 5 日］

森林変化のフリーオンライン分析ツール公開

Global Forest Watch は特定の地域，時間内での森林変化を GIS（地理情報システム）についての経験がなくとも衛星画像から分析できる無料のオンラインソフトを公開。

［Mongabay 1 月 6 日］

コンゴ盆地に世界最大の熱帯泥炭地の存在が判明

コンゴ盆地中央部の広大な泥炭地は 2012 年まで知られていなかったが，Nature 誌に発表された英リーズ大学の調査により，14.5 万㎢と世界最大規模で，全世界の熱帯泥炭地の炭素の 30%に当たる 300 億トンを蓄えていることが判明。

［Environment News Service 1 月 17 日］

スマトラ島の 2 県で森林火災の非常事態宣言

スマトラ島リアウ州の 2 県で早くも森林火災の非常事態宣言が発せられた。2017 年は乾燥した気象条件が予測され，6 月から 10 月にかけて 2015 年の大火災の再来が懸念されている。

［Jakarta Post 1 月 21 日］

雨季でも違法伐採を監視できる衛星「だいち 2 号」

日本の地球観測衛星「だいち 2 号」はアンテナから発射した電波が地上から反射された複数の電波を合成して森林の有無を天候に左右されずに解析できる。この高性能レーダーを使った「熱帯林早期警戒システム」を JICA と JAXA は昨年 11 月にウェブ上に公開した。［朝日 1 月 22 日］

チリ中・南部の森林火災で 50 万haが焼失

チリ中部から南部で，1 月下旬から 50 万 ha 以上の森林を焼き尽くす同国史上最悪の火災が猛威を振るった。10 年近く続く干ばつ，歴史的な高温と強風により火災が拡大し，少なくとも 11 人が火災の犠牲になり，43 人を放火の疑いで逮捕。

［Environment News Service 2 月 6 日ほか］

インドネシアが泥炭地の水位監視システムを義務化

泥炭復興庁（BRG）はアブラヤシ等の土地開発権を持つ企業に対し，泥炭地が湿潤状態を保つよう，地下水位をモニターして記録する water logger システムの設置を義務付ける規制をまもなく実施。［Channel News Asia 2 月 7 日ほか］

FSC がオーストリアの企業を違法伐採で資格停止に

FSC は 1 年以上にわたる調査の末，オーストリアの木材企業 Schweighofer 社をルーマニアの国立公園を含む地域からの違法木材を調達し続けてきたとして，資格停止処分に。ルーマニアには欧州最後の低地原生林がある。

［Mongabay 2 月 23 日］

熱帯林破壊のホットスポットの新たな分析結果

Global Forest Watch によりアマゾン，コンゴ，インドネシアでの 14 年間の森林破壊のホットスポットの変化がビッグデータ分析で明らかにされた。［World Resources Institute 2 月 26 日］

ウータン会員のページ（第3回）

ウータン・森と生活を考える会の会員には、いろいろなことで活躍されているかたがたくさんおられます。そのような会員のみなさんに、自己紹介・近況・入会の動機・期待・提案などを自由に書いていただくことにより、会員相互の交流を深め、今後の会の運営にも生かしていきたいと思います。書いてみたいというかたは、ウータン・森と生活を考える会にメールなどでご連絡下さい。（米澤）

近況報告／浅田　聡

こんにちは、みなさん。ウータンのミーテイングに参加しなくなってから随分と久しくなりますが、いつも楽しく会報誌を読ませていただいています。転職を機に関西から関東へと転勤になり、現在は自然豊かな栃木県の那須高原で暮らしています。那須は自然豊かな地域で、様々な生態系が存在する、いわば日本の中のボルネオと言っても過言ではない素晴らしい場所です。会報誌を読んでボルネオのタンジュン・プティンの状況については大変危惧していますが、ウータンの活動として、個人的にはクラウドファンディングの利用による現地スタッフへの資金援助やＳＮＳ、メルマガを利用した会員への情報発信、それから従来から行っているエコツアーや集会等に力を入れて、これからも活動を続けていっていただきたいと思っています。特に、環境問題に対して興味を持っている潜在的な人たちの掘り起こしは、これからのウータンの活動にとって、とても重要な意味を持ってくると思います。現在は、なかなか関西に戻る機会がないのですが、今後、機会があれば是非、関西や東京でのイベント等に参加をしたいと思っていますので、ウータンのスタッフの皆さん、頑張って活動を続けてください。

高阪@育児専念中

こんにちは。高阪です。今は 2 歳と 1 歳の二児の母となり、子どもたちの世話、遊び相手、家事の日々を送っているため、とても久しぶりの投稿となります。

私は 2008 年～2012 年頃、積極的にウータンに参加していました。私たちの生活により、知らず知らずのうちに、海外の平和に暮らす人々の生活を脅かしているというのが嫌で、なんとか食い止めたいというのが私の願いです。私はもともと青年海外協力隊でボルネオ島で活動していた経験があったので、大好きなボルネオにも直接関われるウータンの活動を選択しました。ウータンでは、少人数ながら、地道な努力で成果をあげられてるところ、草の根の協力をされてるところ等、学ばせていただいたところがたくさんあり、活動自体とても楽しかったです。特に FNPF のバスキさんとの出会いは、私の人生にとってとても貴重なものとなりました。快くバスキさんのフィールドへ行かせてくれた西岡さんをはじめ、ウータンのベテランの方々にはとても感謝しています。

今は毎晩疲れて子どもたちと一緒に寝てしまい、自分の時間がほとんどとれない日々のため（3 年間一度も飲み会に行ってません）、ウータンの活動に以前のように参加できない状況ですが、ウータンの活動を心より応援しています。

イノさんのきまぐれ読書あんない

井下祥子

『生物多様性どう生かすか』保全・利用・分配を考える

山村則夫編　昭和堂　2011 年

長年熱帯林の生物を研究してきた湯本貴和氏による「生物多様性は生かされてきたか 持続的利用と破綻の歴史」他、「科学と政治のあいだ」「食卓から考える」「遺伝資源利用による利益の衡平で公正な配分」など。

たとえば、４千種あったコメのうち、現在売られている品種は、たった 10 数種。それも「美味しい」コシヒカリの系統ばかり。将来環境が激変したときはどうなるか…？

原生林保護、といった観点だけでなく、私たちが日々選んでいる「くらし」のあり方も問われる。

会計より　ありがとうございました！

井下祥子

会費・寄付をいただいた方（ 2016.9.21～2017.2.23）（敬称略）

インドネシア火災支援カンパをいただいた方（敬称略）

✉ ＜おたよりから＞

☆私は終活を進めながら、ウータンの活動を見守っています。若い力が増えたことは素晴らしいですね。国への働きかけも必要だとおもいます。（抜粋）　A.C

☆なかなか関西には戻れませんが、がんばって活動を続けてください。　S.A

振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。

領収書がご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。（メッセージも掲載させていただくこともございます。掲載不可の場合はお書き添えください）

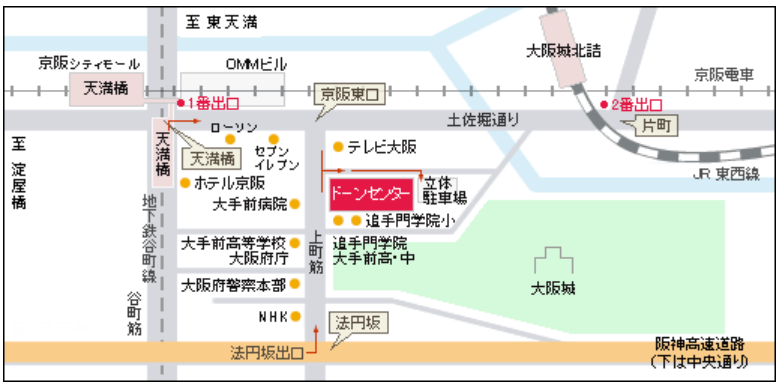
☆ 口座間の送金を利用されますと、お名前のふりがなのみの通知になり、住所不明のため、新規の方は会報が届かない場合があります。お手数ですが、振込用紙をご利用ください。

オランウータンを守る 熱い男　ハルディさん大阪に来る！

4月16日(日)14:00～16:30(開場13:40)

会場:ドーンセンター(大阪府立男女共同参画・青少年センター)和室1・2にて

オランウータンはインドネシアのスマトラ島とボルネオ島の限られた場所にしか生息していません。森林減少によるオランウータン絶滅の危機が叫ばれるようになって久しいですが、インドネシアではアブラヤシ農園の開発などにより、深刻な状況が続いています。この問題は「見えない油＝パーム油」を通じて実はわたしたちの生活とも深いつながりを持っているのです。



(ドーンセンターホームページより)

このセミナーでは、インドネシアのボルネオを中心に、最前線の現場でオランウータンの救助・保護活動を行っている C.O.P（Center for Orangutan Protection）からハルディさんを招き、現在オランウータンが直面する窮状についてお話していただき、私たちに何ができるかを考えます。

【内容】「日本とパーム油のつながり」（石崎雄一郎：ウータン・森と生活を考える会事務局長）
「ボルネオの森林破壊とオランウータン」（ハルディ・バクチャントロ：Center for Orangutan Protection）、逐次通訳付、「質疑応答、ディスカッション」

【参加費】無料

【お申込】yuruissy@gmail.com 石崎まで

【主催】熱帯林行動ネットワーク（JATAN）

【協力】ウータン・森と生活を考える会、メコン・ウォッチ、FoE Japan、地球・人間環境フォーラム（ＧＥＦ）
レインフォレスト・アクション・ネットワーク日本代表部、サラワク・キャンペーン委員会、
ボルネオ保全トラスト・ジャパン

【問合せ】西岡（hutan.nishioka@docomo.ne.jp）、石崎（info@hutangroup.org 090-8145-1146）まで
（内容はことなりますが、ハルディさんの講演会が４月 14 日（金）19 時 00 分から、サラヤ株式会社の本町西ビルでも開催されます。）

※ウータン・森と生活を考える会へのご支援をお願いします。ご寄付の振込先は以下の通りです。

振込先：ゆうちょ銀行　００９３０-４-３８８０　ウータン・モリトセイカツヲカンガエルカイ

（会費を頂いた方も含め、すべての方に振込用紙を同封しております。ご了承ください）

※インドネシア森林火災カンパの報告は、もう少し遅れます。申し訳ありません。